仙台市文化財調査報告書第410集

富　沢　遺　跡

第146次発掘調査報告書

2013年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第410集
富沢遺跡第146次発掘調査報告書
二〇一三年　三月
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第410集

富　沢　遺　跡

第１４６次発掘調査報告書

２０１３年３月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解とご協力を賜り感謝申し上げます。仙台市内には、旧石器時代から近世に至るまで数多くの埋蔵文化財が残っています。当教育委員会といたしましては、市民の皆様からのご理解・ご協力のもと、これらの文化財を保存・活用し、次世代へ継承していけるように努めているところです。

本報告書は店舗建設に伴い平成24年度に実施しました富沢遺跡第146次発掘調査の成果をまとめたものです。

富沢遺跡は仙台市の東南部の太白区富沢、長町南、泉崎に広がる面積約90haにおよぶ遺跡です。この地域では土地区画整理事業やその後の仙台市営地下鉄南北線の開通によって、仙台市南部の拠点となる地域となっています。これまで富沢遺跡では多くの調査が行われ、旧石器時代から近代にかけて、人間の生活の痕跡が残されていることが明らかになっています。なかでも、第30次調査の旧石器時代の調査成果は、遺跡の保存、現地での展示・公開する「地底の森ミュージアム―富沢遺跡保存館―」の建設へと当初の計画の変更がはかられました。平成8年11月に開館した富沢遺跡保存館は、当時の自然環境と人々の生活をよみがえらせる展示と、様々な普及活動を通して、広く市民の皆様にご利用いただいているところです。

本報告書が学術研究はもとより、市民の皆様にも広く活用され、地域の歴史と文化財に関心を抱く契機になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および調査報告書の刊行にあたり、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げる次第です。

平成25年3月

仙台市教育委員会

教育長　　青沼　一民

例　言

1．本書は、店舗建設に伴う富沢遺跡第146次調査の報告書である。
2．発掘調査は、仙台市教育委員会の委託を受け株式会社ノガミが行った。
3．本書の作成・編集は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 庄子裕美、篠原信彦の監理のもと株式会社ノガミ福山俊彰が担当した。本書の執筆分担は以下のとおりである。
　庄子裕美　第１章第３節
　福山俊彰　第１章第１・２節、第２～５章
4．整理作業・報告書作成は、株式会社ノガミ関東支店にて行った。
5．野外調査と報告書作成にあたり、株式会社七十七銀行より協力を賜った。
6．調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1．本報告書の土色については、「新版標準土色帖（2002年版）」（小山・竹原：2002）に準拠している。
2．本文・挿図で使用した方位は全て座標北で統一している。
3．図中の座標値は、日本測地系の平面直角座標系（Ｘ系）に準拠している。
4．標高値は、東京湾平均海面高度（T.P）を示している。
5．座標値と標高値は震災後のデータを使用している。
6．挿図縮尺は、全体図：1/80、断面図：1/40を基本としたが、スケール付近にその都度示した。
7．挿図、その他のスクリーントーン等の凡例は、その都度注釈を加えた。
8．本文中の「擬似畦畔Ｂ」は水田畦畔直下層の上面に認められる高まりを示している（斎野他：1987）。
9．本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田:1980）は、これまでの仙台市域の調査報告や東北中北部の研究から、「十和田a火山灰（To-a）」と考えられている。降下年代は現在、西暦915年（延喜15年）と推定されており、本書もこれに従う。
　山田一郎・庄子貞雄　1980「宮城県に分布する灰白色火山灰」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』
　仙台市教育委員会　2000『沼向遺跡第１～３次発掘調査』仙台市文化財調査報告書241集
　小口雅史　2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題－十和田aと白頭山（長白山）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

〈本文目次〉

序文
例言・凡例
第１章　遺跡の概要と調査要項・調査に至る経緯 …… 1
　第１節　富沢遺跡の概要 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
　第３節　調査に至る経緯 …… 1
第２章　調査の方法と経過 …… 3
　第１節　調査方法 …… 3
　第２節　調査の経過 …… 4
第３章　基本層序 …… 4
第４章　検出遺構と出土遺物 …… 10
　第１節　５層上面 …… 10
　第２節　７層上面 …… 10
　第３節　９ａ層上面 …… 13
　第４節　11ａ層上面 …… 13
　第５節　下層の調査 …… 16
第５章　まとめ …… 17

〈挿図目次〉

第１図　富沢遺跡と周辺の遺跡 …… 2
第２図　調査区位置図 …… 3
第３図　調査区設定図 …… 3
第４図　基本層序柱状図 …… 5
第５図　土層観察地点位置図 …… 6
第６図　調査区土層断面図 北区 …… 7
第７図　調査区土層断面図 南区西側 …… 8
第８図　調査区土層断面図 南区西側・東側 …… 9
第９図　５層上面平面図・断面図 …… 11
第10図　７層上面出土遺物分布図・断面図 …… 12
第11図　９ａ層上面平面図・断面図 …… 14
第12図　11ａ層上面平面図 …… 15
第13図　11ａ層上面・ＳＤ１断面図 …… 16
第14図　下層の調査範囲 …… 16
第15図　周辺調査との基本土層対応図 …… 17
第16図　５層上面と周辺の遺跡 …… 18
第17図　11ａ層上面と周辺の遺跡 …… 19

〈表目次〉

第１表　基本層の土層注記表 …… 5

〈写真図版目次〉

写真図版１　基本層序、調査区全景、５層 …… 23
写真図版２　５・７・９ａ・11ａ層 …… 24
写真図版３　11ａ層・ＳＤ１・土層断面 …… 25
写真図版４　土層断面、調査終了状況、出土遺物 …… 26

第１章　遺跡の概要と調査要項・調査に至る経緯

第１節　富沢遺跡の概要

富沢遺跡は、仙台市の南西部、太白区富沢・泉崎・長町・鹿野等に位置し、水田跡を中心とする総面積約90haに及ぶ広大な複合遺跡である。

遺跡は、名取川と広瀬川に挟まれた沖積地：郡山低地の西半部にある。現在は土地区画整理事業により盛土造成がなされ、大部分は住宅地となっているが、30年ほど前まで一帯は水田として利用されていた。盛土造成以前の旧地形は北西から南東方向に緩やかに傾斜し、標高は約９ｍ～16ｍである。

富沢遺跡の発掘調査は、1982年以降、現在までに145回を数える調査が継続的に実施されており、弥生時代から近世に至る水田跡が重層的に検出されている。また、弥生時代の水田跡の下層においても、数地点で縄文時代の遺構と遺物が確認されている。さらに1987年～1988年に調査が実施された第30次調査では、縄文時代の遺構面のさらに下層から、旧石器時代の遺構と遺物が発見され、約２万年前の樹木や植物化石、動物のフン、昆虫化石等も多数検出されており、仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）において、その保存及び公開がなされている。

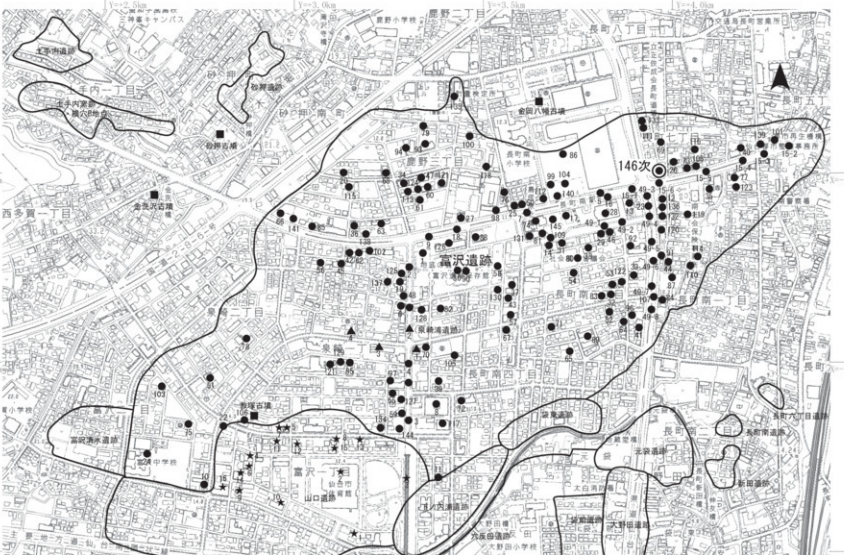
第２節　調査要項

道跡名　　富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号01369　仙台市文化財登録番号Ｃ－301）
所在地　　宮城県仙台市太白区長町７丁目301-28地内
調査原因　店舗建設に伴う事前調査
調査主体　仙台市教育委員会
調査担当　仙台市教育委員会生涯学習部文化財課
　　調査指導係 主事　　庄子裕美　　調査指導係 専門員　　篠原信彦
調査組織　株式会社ノガミ
　　主任調査員（調査・整理）福山俊彰　　調査補助員（調査）　　長谷川一郎
調査期間　平成24年５月14日～平成24年８月31日
調査対象面積　216㎡
調査面積　　42㎡
整理期間　平成24年９月１日～平成25年３月８日

第３節　調査に至る経緯

富沢遺跡第146次発掘調査は、富沢遺跡内で計画された店舗建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

平成24年３月５日付けで株式会社七十七銀行より富沢遺跡地内の仙台市太白区長町七丁目301－28にかかる地区（1,642.99㎡）について店舗建設の協議書が提出された。仙台市教育委員会では本工事が３階建て杭基礎工事を伴うことから、富沢遺跡の地下遺構が損なわれると判断し、店舗建設工事に先立ち本発掘調査を必要とする旨の回答文を平成24年３月９日付けH23教生文第149－49号で送付した。その後、株式会社七十七銀行より委任を受けた清水建設株式会社と協議を行い、本調査を実施することになった。



第１図　富沢遺跡と周辺の遺跡

第２章　調査の方法と経過

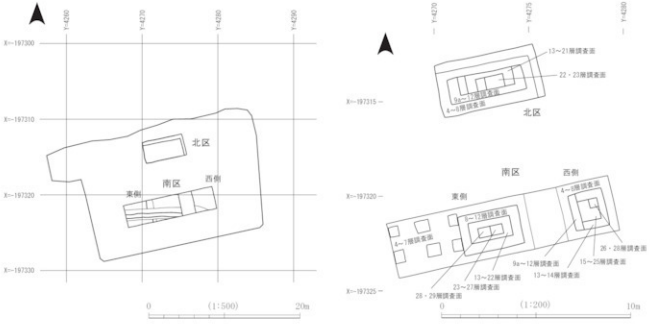
第１節　調査方法

調査対象地は宮城県仙台市太白区長町７丁目301-28地内に位置する。株式会社七十七銀行店舗建設工事の予定地は、太白区役所の北東約150m、仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）からは北東約550mの地点にある。現況は太白区役所前交差点に面する駐車場で調査対象面積は216㎡である。

調査に先立って、調査範囲・区域を確認した後、重機によりアスファルト及び盛土の除去作業を行ったが、調査区内には盛土が厚く堆積していて、重機による掘削深度は最終的に1.5m前後に達した。アスファルト直下において東北特殊鋼の旧建物と思われる鉄筋コンクリートの基礎部分が残存していることが確認された。

盛土掘削終了後、コンクリート基礎部分を除去したが調査可能な場所は限定され、大きく北区、南区に分割した。南区はコンクリートパイルによってさらに東西に分割され、それぞれ南区西側と南区東側と呼称した。３地点を合わせた調査面積は42㎡である。近隣住民への調査開始説明・挨拶を行った後、南区から調査を開始した。

第２図　調査区位置図



第３図　調査区設定図

調査区の座標は、国家座標（日本測地系）を基準とし、基準点及びB.M.を設置して調査の基準とした。

調査は、各層毎に精査・遺構確認・調査を行い、写真撮影・測量を行った。第14層以下の下層調査については、土層断面観察を主体として調査を行った。測量は、トータルステーションを使用し、写真は35㎜モノクロフィルム・カラースライドフィルムとデジタルカメラで撮影を行った。水田跡の認定は、「水田跡の基本的理解－仙台市における水田跡の検出と認定－」（『第３回東日本の水田跡を考える会－資料集』仙台農耕文化勉強会：1990）に基づいている。

第２節　調査の経過

５月期　７日、仙台市役所文化財課及び現地において調査の打ち合わせを行う。８日より調査前の準備作業を行い、14日より現地調査を開始する予定であったが、鉄筋コンクリート基礎部分の上部除去・搬出及び盛土掘削に１ヶ月以上の期間を要するため、７月以降に調査を開始することとなった。

７月期　５日、現地にて打ち合わせを行う。９日、近隣住民への発掘調査開始の事前挨拶を行う。10日、調査区内の水抜き作業を行う。11日、作業員説明会及び安全講習を行う。12日、鉄筋処理・コンクリート被覆作業等の調査区内安全対策を実施する。17日より調査を開始した。17・18日、側溝の掘削及び土層の確認・観察を主体とする人力による調査を進めた。19日、南区の調査範囲を確定し、調査を開始した。24日、第5層上面で東西方向に延びる畦畔が確認された。31日、南区第８層までの調査を終了し、調査範囲を縮小して第８層以下の調査を行った。

８月期　３・６日、調査区北側部分の盛土及び調査残土の掘削・搬出を行い、北区の調査範囲を確定し、７日、北区の人力による調査を開始した。同日、南区東側の第11層上面で溝状を呈する落ち込みが検出された。20日、南区第13層以下の下層調査を開始する。23日、北区第13層までの調査を終了し、第13層以下の下層調査を開始する。24日、調査区全体清掃の後、午後にスカイマスター使用による写真撮影を行った。28日、土層断面測量を終了した。29日、七十七銀行・清水建設への調査終了説明を行い、同日、発掘器材搬出及び近隣住民への調査終了挨拶を行った。31日、調査区・事務所等の安全確認を行い、現地調査を終了した。

第３章　基本層序

調査区内には、約1.5mの厚さで盛土がなされていた。今回の調査ではその直下の１層から約2.8m掘り下げ、大別して29層まで確認した。層によってはさらに細分したものもある。５層では畦畔上面で灰白色火山灰が検出されている。８層以下では植物遺体の混入が認められる。堆積状況は南側に隣接する第15次ⅤE区・Ⅵ区（1987）及び北東側に隣接する第26次調査区（1987）に近い状況を示している。各層の層相は以下の通りである。

1　層：10YR3/1 黒褐色シルト質粘土。白色砂粒を多く含む。旧表土。

2　層：7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土。旧水田跡。鉄分の沈着がみられる。

3　層：2.5GY2/1 黒色シルト質粘土。水田土壌。２層により攪乱され調査区内に部分的に遺存している。

4　層：5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト。洪水層。全域に分布する。上面は一部で２層の攪乱が及んでいる。３層が遺存している部分では層の上面は３層耕作の影響により起伏がある。須恵器小片が1点出土している。

5　層：7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土。水田土壌。全域に分布する。しまり粘性ともに強い。畦畔上部に灰白色火山灰がブロック状に混入する。下面は耕作による起伏がある。

6　層：N1.5/ 黒色粘土。自然堆積層。5Y4/1灰色シルトと互層堆積するが５層耕作の影響により乱れている。遺存は不良で南区西側でのみ堆積が確認されている。

7　層：2.5Y3/1 黒褐色粘土。水田土壌。全域に分布する。場所により層下部で８層がブロック状に混入する。しまり・粘性ともに強い。下面は耕作による起伏がある。南区西側の一部を除き、上面は５層の耕作の影響を受けている。土師器片が南区東側で出土している。

8　層：5Y4/1 灰色粘土。7.5Y2/1黒色泥炭質粘土と互層堆積する。全域に分布する。層の上面は７層耕作の影響により起伏がある。この層から下層で植物遺体が認められる。

9ａ層：10YR4/1 褐灰色粘土。水田土壌。全域に分布する。地点により色調が異なり北区の一部ではオリーブ黒色

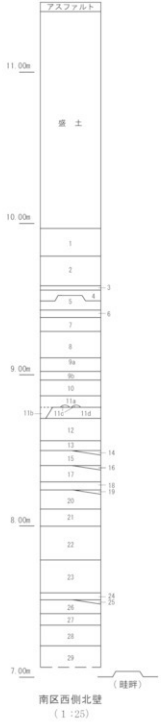
となる。しまり・粘性ともに強い。

9ｂ層：10YR3/1 黒褐色泥炭質粘土。自然堆積層。2.5Y4/2暗灰黄色粘土と互層堆積する。全域に分布する。9ａ層耕作の影響により層の乱れが認められる。

10　層：N1.5/ 黒色泥炭質粘土。自然堆積層。やや色調の明るい10YR3/1黒褐色土との互層堆積が認められる。この層から下層で植物遺体の混入比率が高くなる。

11ａ層：2.5Y4/1 黄灰色粘土。水田土壌。北区では色調が暗く10YR3/2黒褐色土となる。しまり・粘性ともに良い。

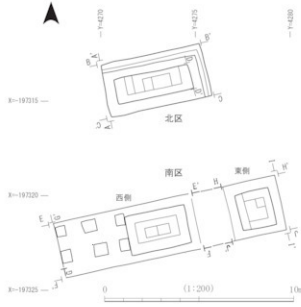
11ｂ層：2.5Y4/1 黄灰色粘土。水田土壌。主に南区西側で認められる。凝灰岩の小ブロック（φ２～５㎜）を多く含む。11ａ層と同質であるが、含有物の違いから細分した。



第４図　基本層序柱状図

層位	土色		土質	層厚		特　　徴
				最小	最大	
1	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	0	22	旧表土。白色砂粒を多く含む。
2	7.5Y3/1	オリーブ黒色	シルト質粘土	0	20	旧水田跡。鉄分の沈着がみられる。
3	2.5GY2/1	黒色	シルト質粘土	0	12	本田土壌。２層により攪乱され調査区内に部分的に遺存している。
4	5Y5/2	灰オリーブ色	砂質シルト	0	15	洪水層。上面は一部で２層の攪乱が及んでいる。
5	7.5Y3/1	オリーブ黒色	粘土	2	17	水田土壌。しまり粘性ともに強い。畦畔上面に灰白色火山灰を含む。
6	N1.5/	黒色	粘土	0	15	自然堆積層。5Y4/1灰色シルトと互層堆積する。
7	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	0	17	水田土壌。場所により層下部で８層がブロック状に混入する。しまり・粘性ともに強い。
8	5Y4/1	灰色	粘土	6	26	7.5Y2/1黒色泥炭質粘土と互層堆積する。これより下層で植物遺体が認められる。
9a	10YR4/1	褐灰色	粘土	2	18	水田土壌。しまり・粘性ともに強い。
9b	10YR3/1	黒褐色	泥炭質粘土	0	15	自然堆積層。2.5Y4/2暗灰黄色粘土と互層堆積する。
10	N1.5/	黒色	泥炭質粘土	1	12	自然堆積層。10YR3/1黒褐色土と互層堆積する。
11a	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	3	13	水田土壌。北区では色調が暗く10YR3/2黒褐色土となる。しまり・粘性ともに強い。
11b	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	0	10	水田土壌。主に南区西側で認められる。凝灰岩の小ブロック（φ２～５㎜）を多く含む。
11c	2.5Y2/1	黒色	泥炭質粘土	0	3	自然堆積層。北区でわずかに認められる。
11d	5Y4/2	灰オリーブ色	粘土	0	12	自然堆積層。色調の明暗による互層堆積が認められる。
12	5Y4/2	灰オリーブ色	粘土	12	26	自然堆積層。10Y2/1黒色粘土と互層堆積する。
13	7.5Y4/2	灰オリーブ色	砂質シルト	0	11	洪水層。植物遺体は比較的少ない。
14	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト質粘土	0	9	自然堆積層。10Y2/1黒色泥炭質粘土と互層堆積する。植物遺体は比較的少ない。
15	N1.5/	黒色	泥炭質粘土	2	12	自然堆積層。色調の明暗による互層堆積が認められる。
16	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	0	5	自然堆積層。層厚は薄く部分的な堆積である。植物遺体は比較的少ない。
17	N1.5/	黒色	泥炭質粘土	6	19	自然堆積層。全域に分布する。植物遺存体を特に多く含む。
18	2.5Y2/1	黒色	泥炭質粘土	0	8	自然堆積層。
19	5Y4/1	灰色	粘土	0	6	自然堆積層。
20	N1.5/	黒色	泥炭質粘土	5	15	自然堆積層。色調の明暗による互層堆積が認められる。
21	2.5Y3/1	黒褐色	泥炭質粘土	4	12	自然堆積層。色調の明暗による互層堆積が認められる。
22	7.5Y3/1	オリーブ黒色	泥炭質粘土	14	26	自然堆積層。5Y4/1灰色粘土と互層堆積する。
23	5Y4/1	灰色	粘土	17	23	自然堆積層。N3/暗灰色泥炭質粘土と互層堆積する。
24	N1.5/	黒色	泥炭質粘土	3	6	自然堆積層。
25	5Y4/1	灰色	粘土	0	3	自然堆積層。
26	2.5Y2/1	黒色	泥炭質粘土	7	11	自然堆積層。
27	N2/	黒色	泥炭質粘土	4	10	自然堆積層。
28	5Y4/1	灰色	粘土	9	13	自然堆積層。N3/暗灰色泥炭質粘土と互層堆積する。
29	N1.5/	黒色	泥炭質粘土	－	－	自然堆積層。

第１表　基本層の土層注記表



第５図　土層観察地点位置図

11 c 層：2.5Y2/1 黒色泥炭質粘土。自然堆積層。北区の11a層水田畦畔が想定される部分でわずかに認められる。

11 d 層：5Y4/2 灰オリーブ色粘土。自然堆積層。南区西側の一部を除いて分布する。わずかながら色調の明暗による互層堆積が認められる。

12　層：5Y4/2 灰オリーブ色粘土。自然堆積層。10Y2/1黒色粘土と互層堆積する。

13　層：7.5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト。洪水層。植物遺体は比較的少ない。

14　層：5Y4/2 灰オリーブ色シルト質粘土。自然堆積層。10Y2/1黒色泥炭質粘土と互層堆積する。北区と南区東側でわずかに認められる。植物遺体は比較的少ない。

15　層：N1.5/ 黒色泥炭質粘土。自然堆積層。色調の明暗による互層堆積が認められる。

16　層：2.5Y4/2 暗灰黄色粘土。自然堆積層。ほぼ全域に分布するが層厚は薄く部分的な堆積である。植物遺体は比較的少ない。

17　層：N1.5/ 黒色泥炭質粘土。自然堆積層。全域に分布する。植物遺体を特に多く含む。

18　層：2.5Y2/1 黒色泥炭質粘土。自然堆積層。ほぼ全域に分布する。

19　層：5Y4/1 灰色粘土。自然堆積層。ほぼ全域に分布するが層厚は薄く部分的な堆積である。

20　層：N1.5/ 黒色泥炭質粘土。自然堆積層。色調の明暗による互層堆積が認められる。

21　層：2.5Y3/1 黒褐色泥炭質粘土。自然堆積層。色調の明暗による互層堆積が認められる。

22　層：7.5Y3/1 オリーブ黒色泥炭質粘土。自然堆積層。5Y4/1灰色粘土と互層堆積する。ほぼ全域に分布する。

23　層：5Y4/1 灰色粘土。N3/暗灰色泥炭質粘土と互層堆積する。自然堆積層。全域に分布する。

24　層：N1.5/ 黒色泥炭質粘土。自然堆積層。ほぼ全域に分布する。

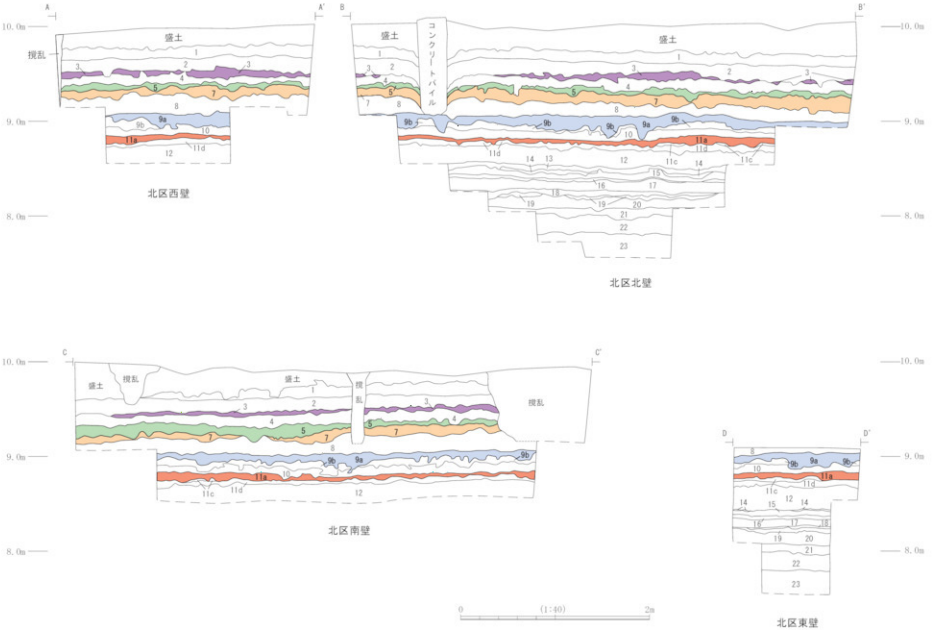
25　層：5Y4/1 灰色粘土。自然堆積層。ほぼ全域に分布するが層厚は薄く部分的な堆積である。

26　層：2.5Y2/1 黒色泥炭質粘土。自然堆積層。全域に分布する。

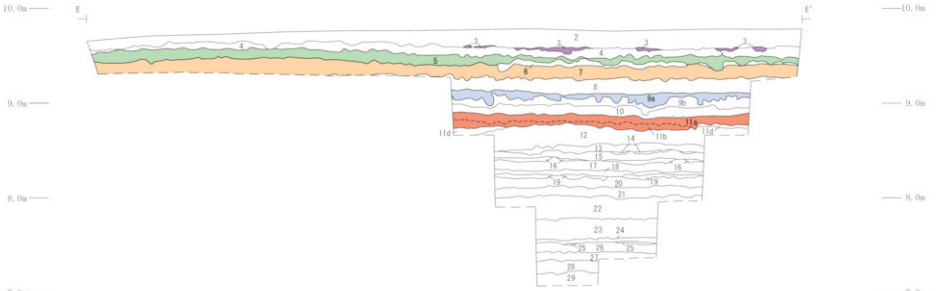
27　層：N2/ 黒色泥炭質粘土。自然堆積層。全域に分布する。

28　層：5Y4/1 灰色粘土。自然堆積層。N3/暗灰色泥炭質粘土と互層堆積する。全域に分布する。

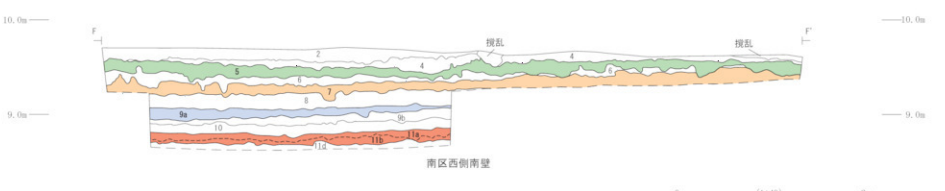
29　層：N1.5/ 黒色泥炭質粘土。自然堆積層。全域に分布する。



第６図　調査区土層断面図 北区

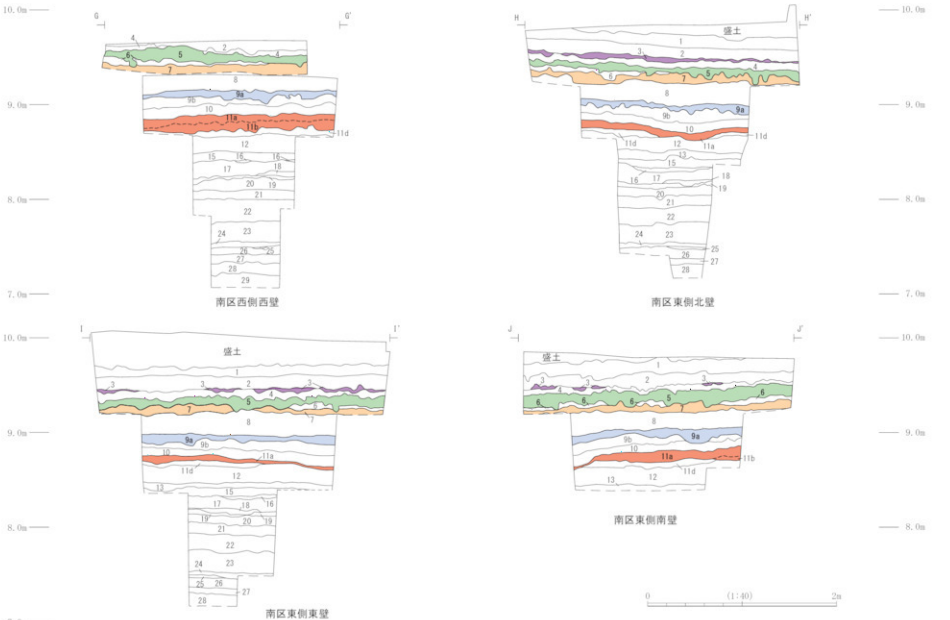


南区西側北壁



南区西側南壁

第７図　調査区土層断面図 南区西側



第８図　調査区土層断面図 南区西側・東側

第４章　検出遺構と出土遺物

確認された水田土壌は、３層、５層、７層、９ａ層、11ａ層である。３層は２層によって攪乱を受けていて遺存している部分はわずかであり水田面は確認されなかった。５層では灰白色火山灰を含む畦畔１条と段差が検出されている。７・９ａ層では畦畔などは検出されなかった。11ａ層では壁面の観察から畦畔が存在した可能性が想定された。11ａ層の直下からは溝跡１条が検出されている。遺物は洪水層と考えられる４層から須恵器蓋１点（写真図版４、１）、７層水田土壌から土師器片13点（写真図版４、２～14）の計14点が出土している。

第１節　５層上面

５層水田跡（第９図、写真図版１・２）

南区では、東西方向の畦畔１条（畦畔１）、南北方向の段差（段差１）によって区画された水田区画５区画を確認した。北区では畦畔は確認されなかった。

〈層の特徴〉オリーブ黒色の粘土で調査区全域に分布している。層厚は２～17㎝である。粘性が強く硬い土質である。層下面は耕作による起伏がある。畦畔上面にはブロック状の灰白色火山灰が混入している。

〈段差・畦畔〉段差と畦畔の高まりは４層を掘り下げていく過程で検出された。段差１は畦畔に直行して検出され、西から東へ低くなっている。高低差は区画①と区画③で約10㎝、区画②と区画④で約６㎝である。畦畔１は洪水層と考えられる４層に被覆されていたためか遺存状況は良好である。一部上面は２層により削平を受けている。畦畔１は上端幅48～56㎝、下端幅136～147㎝、高さは区画①との比高差で４～12㎝、区画②との比高差で６㎝前後、区画③との比高差で11～16㎝、区画④との比高差で17㎝前後である。主軸方向はＮ－88°－Ｅである。東西方位を基準とする傾向がみられ、条里型土地割に則っていると考えられる。

〈水田区画〉西側の段差上部にあたる区画①は3.0×1.1m以上、標高は9.52～9.58mである。同じく段差上部にあたる区画②は3.4×0.9m以上、標高は9.54～9.56mである。段差下部にあたる区画③は8.0×2.9m以上、標高はパイルの攪乱のため未調査の部分から西側で9.48～9.52mであるが、これから東側ではさらに下がる傾向がみられ標高は9.32～9.46mである。南区東側北壁の断面観察では５層が西から東に向かって傾斜していることが確認される。区画④は畦畔①と段差１、さらに調査区南壁に挟まれた狭い範囲で1.6×0.4m以上、標高は9.42～9.51mである。区画⑤は北の調査区にあたり5.1×2.3m以上、標高は9.29～9.43mである。

〈出土遺物・時期〉遺物は出土していない。水田跡の時期は、畦畔上面でブロック状の灰白色火山灰が検出されていることから、同火山灰降下前後の平安時代と考えられる。

第２節　７層上面

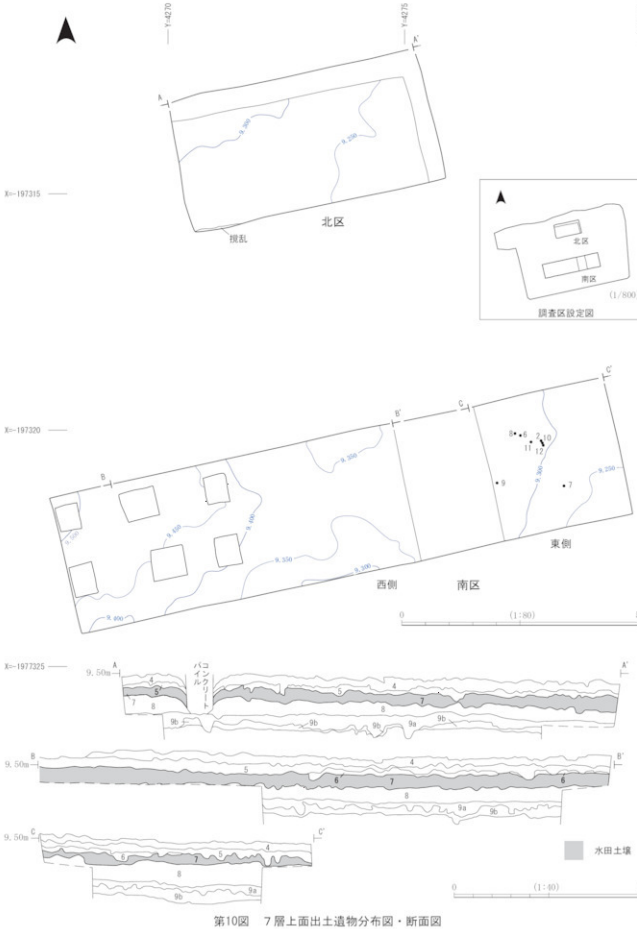
７層水田跡（10図、写真図版２・４）

北区、南区ともに、畦畔などは検出されなかった。層中から土師器片が出土している。

〈層の特徴〉黒褐色の粘土で、調査区全域に分布している。層厚は０～17㎝である。層下面は耕作による起伏がある。水田面の標高は南区で9.18～9.50m、北区で9.21～9.35mである。互層堆積する下位の８層が母体となる土壌と考えられ、場所によっては８層がブロック状に混入していることが認められる。南区の東寄りでは上位の水田土壌５層との間に６層が認められるが、調査区内の多くは６層は検出されず５層の耕作が７層まで達しており、上面は５層の耕作の影響を受けていると考えられる。

〈出土遺物・時期〉南区東側から土師器片13点が出土している。小片で図化が困難だったため写真掲載とした（写真図版４、２～14）。器種・所属時期など詳細は不明である。水田の時期は周辺調査区の層準との対比から古墳時代と考えられる。

第９図　５層上面平面図・断面図



第10図　7層上面出土遺物分布図・断面図

第３節　９a層上面（第11図、写真図版２）

北区、南区ともに、畦畔などは検出されなかった。畦畔は面的には捉えきれなかったが、畦畔が存在した可能性が北区の北壁の断面から推定された。

〈層の特徴〉南区では褐灰色、北区ではオリーブ黒色を呈する粘土で、調査区全域に分布している。層厚は２～18cmである。層下面は耕作による起伏がある。水田面の標高は南区で8.95～9.15m、北区で9.00～9.08mである。互層堆積する下位の９ｂ層が母体となる土壌と考えられる。面的には捉えられなかったが、北区北壁の東寄りで畦畔状の高まりが確認されている。東壁面および南壁面では明瞭な高まりは確認されず詳細は不明である。

〈出土遺物・時期〉遺物は出土していない。周辺調査区の層準との対比から弥生時代中期後葉と考えられる。

第４節　11ａ層上面

11ａ層水田跡（第12・13図、写真図版２・３）

南区東側で北西－南東方向の段差（段差１）とこれにより区画された水田区画３区画を確認した。北区では畦畔などは確認されなかったが、壁面の断面から畦畔が存在したことが想定された。

〈層の特徴〉黄灰色の粘土で調査区全域に分布している。層厚は３～13cmである。層下面は耕作による起伏がある。下位の土層は調査地点で差がみられ、11ｂ層、11ｃ層、11ｄ層とした。11ｂ層は主に南区西側でみられ、凝灰岩の小ブロックが多く混入しており、11ａ層と同じ水田土壌である。含有物の違いから11ａ層と分層した。11ａ層水田跡の耕作に伴い11ａ層より弱い耕作を受けた土層と思われる。11ｃ層は北区東寄りの断面で確認されたもので、畦畔と思われる部分にのみ残存する黒色土で自然堆積層と考えられる。11ｄ層は灰オリーブ色土で一部互層堆積する状況がみられ自然堆積層と考えられる。層厚は薄いもののほぼ調査区全域に分布する。

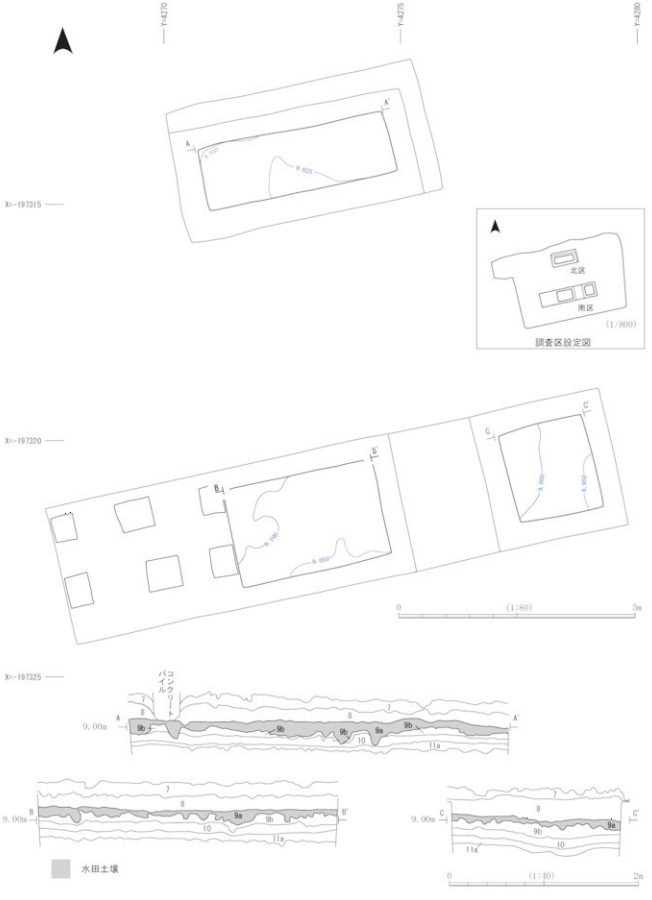
〈畦畔〉段差１の西側はコンクリートパイルにより調査ができなかったが、段差の立ち上がりから連続してやや高くなる傾向があり、この部分が畦畔であった可能性がある。段差下の東側は後述する溝跡の影響によりわずかな溝状の落ち込みを伴っている。北区の北壁面と南壁面の断面観察では段差の延長線上の東寄りで11a層が畦畔状に高まる箇所が確認されている。さらに、この部分では自然堆積層と考えられる黒色土（11ｃ層）がわずかに遺存していて、耕作の影響を受けていないことが想定され「擬似畦畔Ｂ」として捉えられる。面では捉えられなかったが南区から連続した畦畔である可能性が高い。

〈水田区画〉段差１の西側にあたる区画①は7.2×2.0m以上、標高は8.79～8.89m、東側にあたる区画②は段差１と調査区東壁に挟まれた狭い範囲で0.3×1.2m以上、標高は8.76m前後である。区画③は北区の畦畔が想定されるライン（第12図点線表示）から西に当たる地区で3.4×1.4m以上、標高は8.74 ～ 8.88mである。

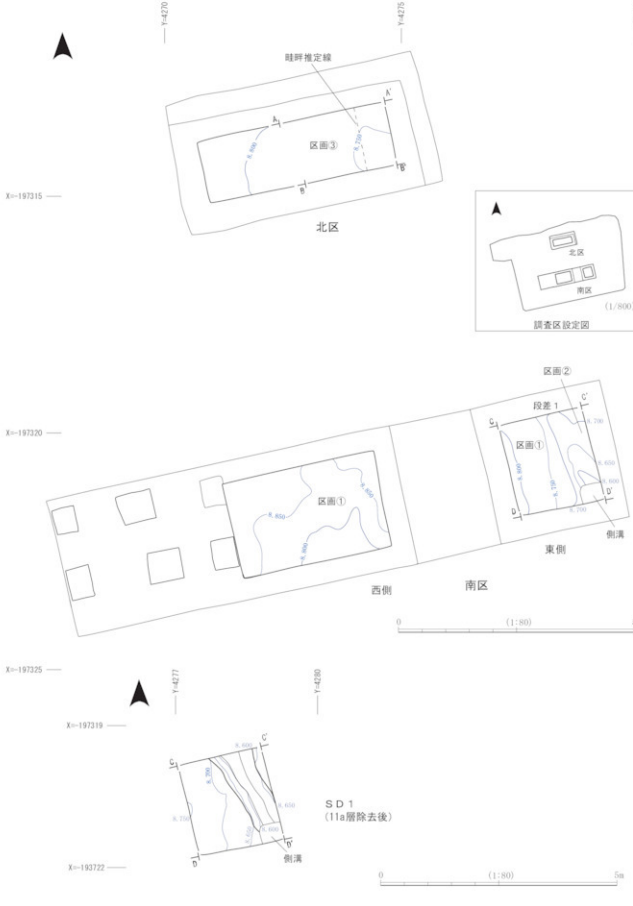
〈出土遺物・時期〉遺物は出土していない。周辺調査区の層準との対比から弥生時代中期中葉と考えられる。

溝跡（第12・13図、写真図版３）

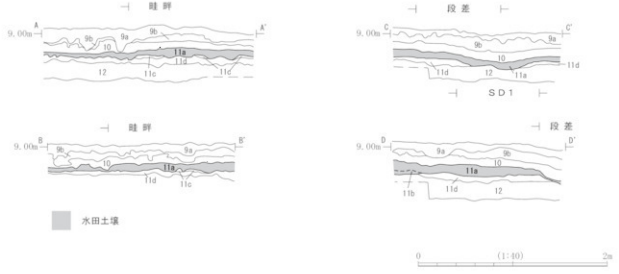
ＳＤ１は11ａ層除去後の11ｄ層上面で検出した。検出長は2.11m、幅64～76cm、深さは西側11ｄ層との比高差で12cm、東側11ｄ層との比高差で９cmで、底面は12層上面まで達している。壁面の断面観察では水田土壌の11ａ層が水田面から連続してＳＤ１内に被覆している。本溝跡は、畦畔の構築にあたり、土を盛る際に掘削した痕跡であると考えられる。



第11図　9a層上面平面図・断面図



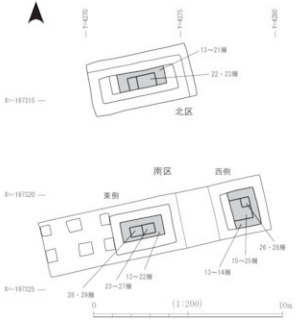
第12図　11a層上面平面図



第13図　11a層上面・ＳＤ１断面図

第５節　下層の調査（第６～８図、写真図版１・３・４）

第13層以下については、下層調査として土層観察を主体とする調査を実施した。安全対策として調査区の縮小を段階的に行い、最終的に現地表面から約4.30ｍの深さまで掘削し、第29層までの調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

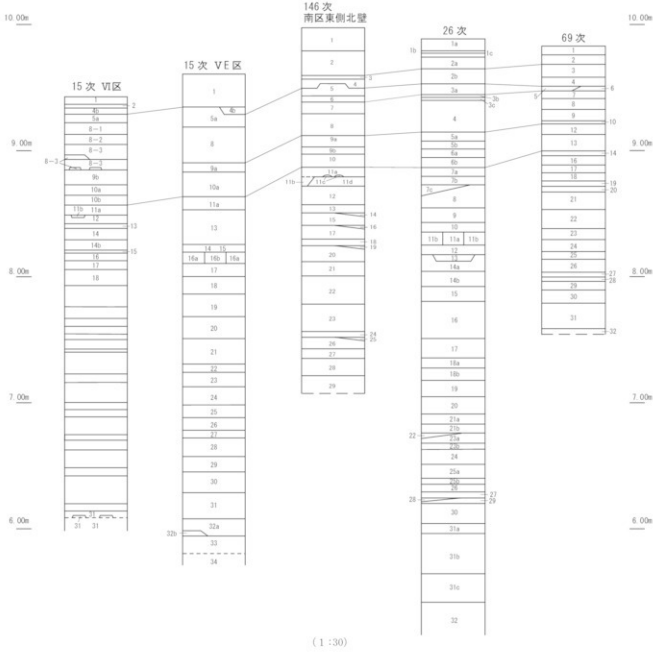


第14図　下層の調査範囲

第５章　まとめ

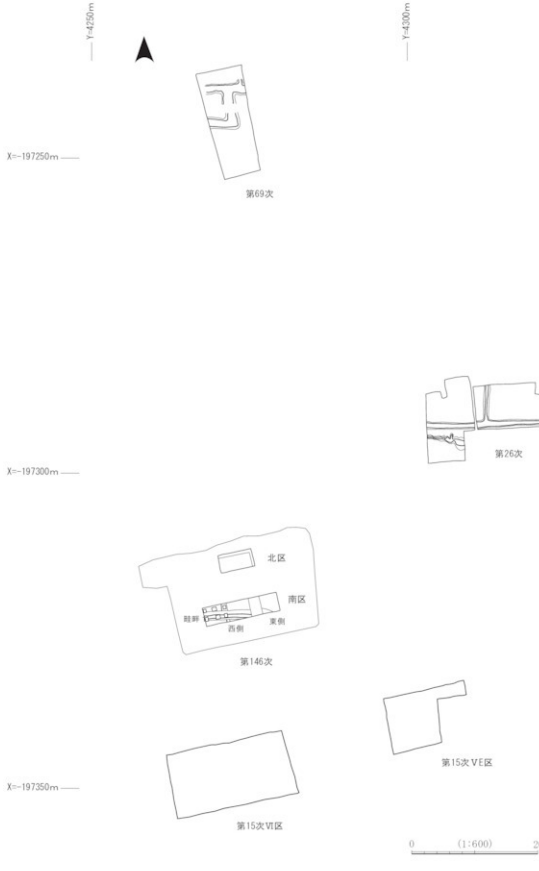
今回の富沢遺跡146次調査では、５層、７層、９ａ層、11ａ層を水田土壌とする水田跡と、11ｄ層上面で溝跡１条を検出した。また、上層による削平を受け水田面として遺存はしていなかったが、水田土壌と考えられる３層が検出されている。出土遺物は洪水層と考えられる４層から須恵器片が出土し、７層水田土壌層中から土師器片が出土している。いずれも小片のため時期の特定までは至らなかった。各水田跡の時期については、これまでに近隣地区で調査が行われた第15次調査ＶＥ区・Ⅵ区（1987）、第26次調査（1987）、第69次調査（1993）の検出状況や基本層序の対応関係から想定することが可能と思われる。

３層水田土壌　灰白色火山灰の上位にあたる層で、２層により削平され遺存状態が悪く水田面は遺存していなかった。第15次調査「Ⅳ～Ⅶ区の層序」（斎野：1987）の３ｂ層、第26次調査の２ｂ層、第69次調査の３層に対応すると考えら

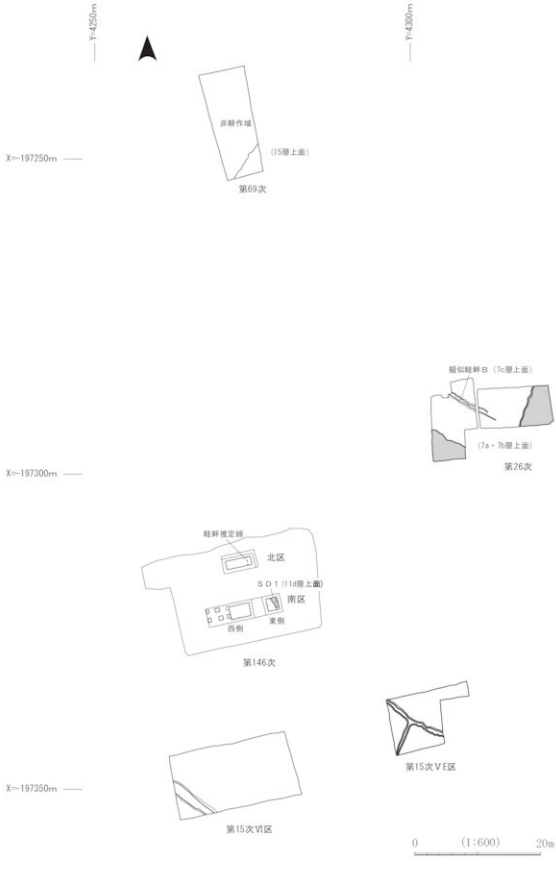


（1：30）

第 15 図　周辺調査との基本土層対応図



第16図　5層上面と周辺の遺跡



第17図　11a層上面と周辺の遺跡

れる。第15次調査ではⅤ区以東で確認されているがⅥE区以西では確認されていない。第26次調査では下面に酸化鉄層が認められることから、乾田の存在が推定されている。第69次調査では東西方向と南北方向の３条の畦畔が検出され、水口が確認されている。所属時期は対応する層位から、中世から近世の時期が考えられる。

５層水田跡　東西方向の畦畔１条が検出された。畦畔上部には灰白色火山灰がブロック状に含まれている。第15次調査「Ⅳ～Ⅶ区の層序」の５ａ層、第26調査の３ａ層、第69次調査の５層に対応すると考えられる。第15次調査ではⅥE区・Ⅵ区ともに畦畔などは検出されていない。第26次調査では東西方向と南北方向の「Ｔ」字状の畦畔が検出され、東西方向の畦畔は今回の146次で検出された「畦畔１」の主軸方向と一致している。第69次調査においても、ほぼ主軸方向を同じくする東西方向と南北方向の４条の畦畔が検出されている。今回の調査を含めていずれの調査区においても、畦畔上部で灰白色火山灰が検出されている。この時期の畦畔は東西南北の方位を基準とし、条里型土地割に則っていると考えられる。所属時期は同火山灰降下前後の平安時代であると考えられる。

７層水田跡　上面は調査区内の大半で５層の水田の影響を受けており、今回の調査では畦畔などは検出されなかった。遺物は南区東側から土師器片が出土している。第15次調査「Ⅳ～Ⅶ区の層序」の７ａ層、第26次調査の３ｂ層、第69次調査の７層に対応すると考えられる。第15次調査ではⅤ区で水田土壌として検出されているが、ⅥE区・Ⅵ区では確認されていない。第26次調査では畦畔状の高まりとこれに並行して６基のピットが検出されている。第69次調査では畦畔は検出されていないが溝状遺構が１条検出されている。その性格については水路ではなく畦畔構築の際の痕跡であることが指摘されていて、今回11ｄ層で検出されたＳＤ１はこれと同様な性格が考えられる。所属時期は対応する層位から古墳時代であると考えられる。

９ａ層水田跡　畦畔などは検出されなかった。第15次調査「Ⅳ～Ⅶ区の層序」の９ａ層、第26次調査の５ａ層、第69次調査の11層に対応すると考えられる。この層の直上に堆積する層は、褐灰色土と黒色土が互層堆積する自然堆積層で、富沢遺跡の広い範囲に分布する層であり、弥生時代水田跡を分ける鍵層となっている（佐藤：1991）。第15次調査ではⅥE区で畦畔が検出されているがⅥ区では確認されず、非耕作域が存在していた可能性が指摘されている。第26次調査では水田跡は検出されていない。第69次調査では平行する２条の畦畔と水田の耕作・非耕作域の境が検出されている。所属時期は対応する層位から弥生時代中期後葉（十三塚式期）であると考えられる。

11ａ層水田跡　畦畔は面的には捉えられなかったが、壁面の土層や南区東側で検出したＳＤ１との関係から、畦畔が存在したことが想定された。第15次調査「Ⅳ～Ⅶ区の層序」の11ａ層、第26次調査の７ａ層、第69次調査ではやや状況がことなるものの14層もしくは15層に対応すると考えられる。第15次調査ではⅥE区・Ⅵ区ともに畦畔が検出されている。第26次調査では７ａ層では畦畔などは検出されていないが、下層の７ｃ層で「擬似畦畔Ｂ」と段差が検出されている。第69次調査では14層では水田土壌のみの検出で畦畔などは検出されていないが、15層では水田の耕作・非耕作域の境が検出されている。今回の調査で想定された畦畔は、第15次調査ⅥE区で検出された畦畔の延長線上に位置している。他の調査区で検出された畦畔と同様に北西－南東方向を示すものの、第15次調査や第26次調査で検出された畦畔からはやや東に振れる方向を示している。所属時期は、対応する層位から弥生時代中期中葉（桝形囲式期以降）に相当すると考えられる。

今回の調査では、南側に隣接する第15次調査ⅥE区・Ⅵ区及び北東側に隣接する第26次調査、北に隣接する69次調査の調査成果と関連する結果が得られた。今後、周辺調査の成果と比較・検討することによって各層水田面の耕作域や範囲などがより明確になるものと思われる。

〈引用・参考文献〉

太田昭夫・中富　洋 1995 「富沢・泉崎浦・山口遺跡（８）－富沢遺跡第88次・89次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第203集

工藤哲司他 1984 「富沢水田遺跡　第１冊－病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書」仙台市文化財調査報告書第67集

斎野裕彦 1987 「第４章 調査の方法と調査概要　第２節 基本層序」「富沢・仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴なう富沢遺跡第15次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第98集

佐藤甲二 1988 「富沢遺跡－第28次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第114集

佐藤甲二 1991 「第４章 富沢地区基本層序案・層位対応関係案」「富沢・泉崎浦・山口遺跡（３）」仙台市文化財調査報告書第152集

主濱光朗・伊藤雅和 2008 「富沢遺跡－第141次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第322集

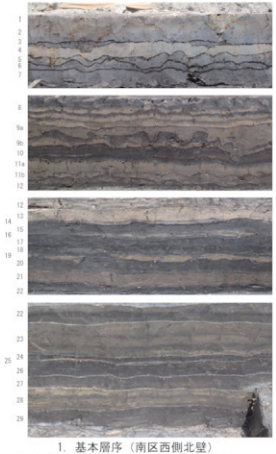
仙台農耕文化勉強会 1990 「水田跡の基礎的理解－仙台市における水田跡の検出と認定－」「第3回東日本の水田跡を考える会－資料集」

平間亮輔・佐藤　洋・中富　洋 1993 「富沢・泉崎浦・山口遺跡（６）」仙台市文化財調査報告書第172集

真山　悠・菊池逸夫・鈴木真一郎 1988 「富沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第129集

吉岡恭平 1989 「Ⅳ　泉崎前・泉崎浦地区」「富沢遺跡・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－」仙台市文化財調査報告書第126集

写　真　図　版



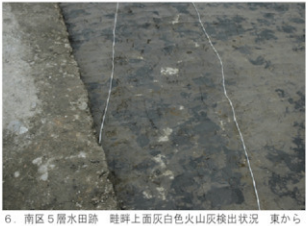
1．基本層序（南区西側北壁）

2．調査区全景　北から

3．調査区全景　南西から

4．北区５層水田跡検出状況　西から

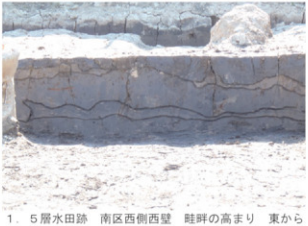
5．南区５層水田跡　畦畔確認状況　西から



6．南区５層水田跡　畦畔上面灰白色火山灰検出状況　東から

7．南区５層水田跡　畦畔検出状況　西から

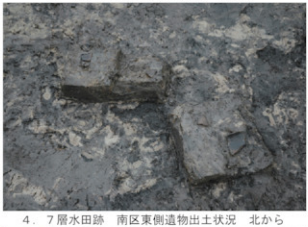
写真図版１　基本層序、調査区全景、５層



1．５層水田跡　南区西側西壁　畦畔の高まり　東から

2．北区７層水田跡検出状況　西から

3．南区７層水田跡検出状況　西から



4．７層水田跡　南区東側遺物出土状況　北から

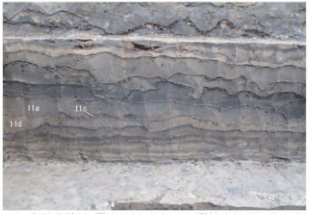
5．北区９a層水田跡検出状況　東から

6．南区９a層水田跡検出状況　東から

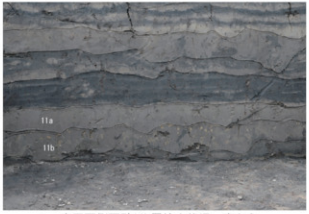
7．北区11a層水田跡検出状況　東から

8．南区11a層水田跡検出状況　東から

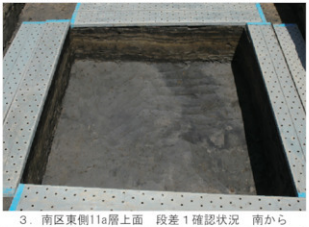
写真図版２　５・７・９a・11a層



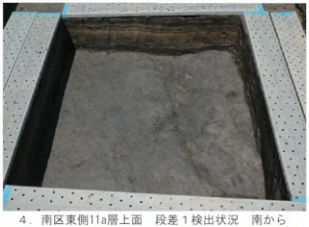
1．北区南壁11a層水田跡畦畔・11c層検出状況　北から



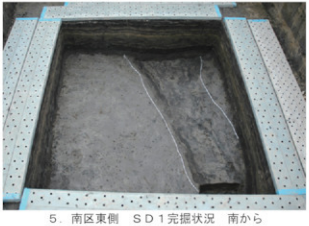
2．南区西側西壁11b層検出状況　東から



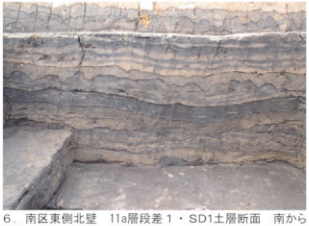
3．南区東側11a層上面　段差１確認状況　南から



4．南区東側11a層上面　段差１検出状況　南から

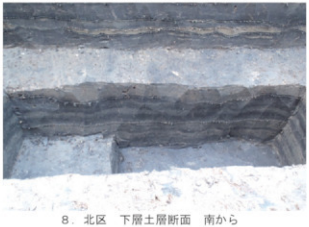


5．南区東側　ＳＤ１完掘状況　南から



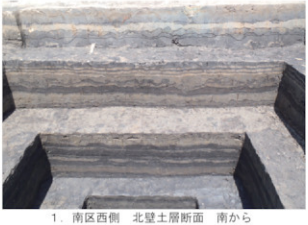
6．南区東側北壁　11a層段差１・SD1土層断面　南から

7．北区　土層断面　南から

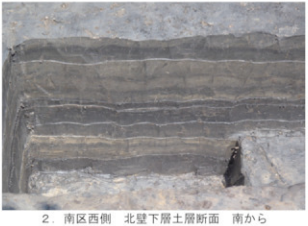


8．北区　下層土層断面　南から

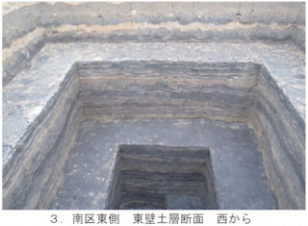
写真図版３　11a層・ＳＤ１・土層断面



1．南区西側　北壁土層断面　南から



2．南区西側　北壁下層土層断面　南から

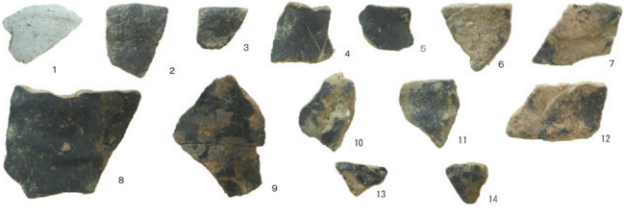


3．南区東側　東壁土層断面　西から

4．南区東側　北壁土層断面　南から

5．北区　調査終了状況　東から

6．南区　調査終了状況　東から



写真図版４　土層断面、調査終了状況、出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	とみざわいせき
書名	富沢遺跡
副書名	第146次発掘調査報告書
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第410集
編著者名	庄子裕美、篠原信彦、福山俊彰
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区一番町4－1－25　TEL022-214-8899
発行年月日	2013年3月8日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
とみざわいせき 富沢遺跡 第146次	せんだいしたいはくく 仙台市太白区 ながまち 長町７丁目 ちばー 301-28地内	41009	01369	38°13′31″	140°52′43″	20120514 ～ 20120831	42㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富沢遺跡 第146次	包含地 水田跡	弥生時代～平安時代	水田跡	須恵器・土師器	

要　約

富沢遺跡は、名取川と広瀬川によって形成された沖積平野の後背湿地に立地する。昭和57年から調査が行われ、弥生時代以降の水田跡が重層的に検出されている。さらに、縄文時代及び旧石器時代の遺構・遺物も確認されている。

今回の調査では、５層水田跡（平安時代；10世紀前半）、７層水田跡（古墳時代）９ａ層水田跡（弥生中期後葉）、11ａ層水田跡（弥生時代中期中葉）の４時期の水田跡と、11ｄ層上面で溝跡１条を検出した。

遺物は、基本層４層から須恵器片１点、７層から土師器片13点が出土した。

水田跡調査後に現地表面から約4.30ｍの深さまで掘削し、基本層29層までを確認したが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

仙台市文化財調査報告書第410集

富　沢　遺　跡

－第146次発掘調査報告書－

2013年３月

発　行　　仙台市教育委員会
宮城県仙台市青葉区一番町４－１－25
文化財課 022(214)8899

印　刷　　株式会社 ライフ
千葉県成田市東和田595　　0476(24)1564